ゲーテ、プロメートイス斷片について

臼井竹次郎

一

一七八〇年七月五日、フリッツ・ヤコービはヴォルフェンビュッテルに始めてレッシングを訪ねた。翌日から二日にわたつてあのスピノザ對話がなされたのである。對話のきつかけはヤコービがゲーテのプロメートイス頌歌を見せて、それに對するレッシングの感想を求めたことから與えられた。ヤコービは魂膽があつての訪問であつたらしいから、ゲーテの詩については對話は發展しなかつた。併しウェルテルについて以前にレッシングが憤慨したことは知つていた筈だから、今度はどうかと言う期待は固よりあつたことであろう。ともあれレッシングは出された詩を一讀してこれを返してから言つた。「憤慨はしません。もうずつと前から人手をくぐらずに初手から知つていましたよ。」ヤコービは聞いてびつくり、「この詩はもう御存じだつたのですか。」「いや、讀むのは始めてですが、結構なものです。」「私もそう思いましたからお目にかけたのです。」「そういう意味ではないので……この詩のとる立場は即ち私の立場に他ならぬのです。正統派の神の概念はもはや私には向きません。私はそれをうけ容れることはできません。一且全 Ἐν καὶ πᾶν 私にわかるのはこれだけです。この詩の目指す所もそれなのです。だから大變氣に入つたと言わねばなりません。」……一且全（ヘン・カイ・パン）の言葉が出ると、待つてましたとばかりにヤコービはスピノザ哲學に話を持つて行き、ゲーテの詩についてはそれなりになつてしまつた。汎神論者は即ち無神論者であるとし、「死んだ犬」、「棘の藪」、「墮落し

たユダヤ人」とスピノザを謗つた十八世紀のことであつた。ヤコービの關心はレッシングがスピノザ哲學の信奉者たることを告白するかどうかにかかつていた。ヤコービがこの詩をどう解釋したかは、對話では表面に出て居らない。だがレッシングはこの詩を始めて一度讀んだだけで、二幕の斷片劇のことは全く知らなかつたのである。ただこの詩を讀んで、これが自分と同じ立場をとるものであることを直らに感じとつたまでのことである。この場合プロメートイスが反逆の言葉を投げつけた鳴神ツォイスを世界の外に存在するキリスト教の神と見て、人間がその神に服從を拒む、何故なれば人間自身が自己の中に創造の力を感じるから、と解したとすれば、このことはこの詩から理解できる。つまり「正統派の神の概念はもはや自分に向かない」からである。レッシング自身すでに正統派の神の概念がどれだけ頑固なものであるかは彼の神學論爭の經驗でよく知つていたことであつた。プロメートイスの頌歌で歌われた人間、「苦しみ、泣き、享樂し、喜び、神を敬わない」人間、創造者プロメートイスに生寫しの人間の前途が今後に望まれるこの詩をレッシングが是認したことは當然と見てよい。

次ぎに、「一且全（ヘン・カイ・パン）、私にわかるのはこれだけ」と言つたのはこの詩の何處を指したものであろうか。われわれ讀者はゲーテのこの詩を讀んでそれが感じられるであろうか。スピノザの說にも一且全の思想にもどの一行も觸れてはいない。ところがレッシングのこの一言がゲーテのプロメートイスはスピノザ哲學を思想內容とするものであるとの定說を生んでしまつた。ドイツ語の敎養ある人なら誰でも早くから知つている作品と雖も、獨力では一言の標語の力に向つては無力に等しいことの一例がここに見られる、とシュタイガーは嘆息する。定說だと言つても無理してまで從う必要のないことは當り前のようで、實際は容易に脫し難いことである。すでにレッシングその人がそのために奮鬪したのであつたけれども。それはともかくとして、ここの場合ライゼガングの解釋に從うと、この詩から一元論と二元論の對立が汲みとられるわけではないが、レッシングが彼の世界觀を考へた時、彼が一且全と結びつけたもの、それから「この詩の目指す所はそれだ」と彼に言わせたもの、それは全能の力を持つた時間、永遠の運命の契機であつ

たであろう、だがこの言葉は始めの「正統派の神の概念は自分に向かない」との言葉との聯關にのみ立つのであろう、そしてレッシングは別にスピノザを考へていたわけではないと。だからレッシングはこの詩の中にむしろ自分の思想を讀みとつたのであつて、彼の一言がこの詩の解釋の定說になるなどは夢にも考えなかつたことである。スピノザの名を彼が言つたのはヤコービの誘導訊問にかかつたのであつて、スピノチストかと聞かれて、ただ、「もしも誰かの名を擧げろと言われれば、他には誰の名も知らない」と言つただけである。

一七八五年に「モーゼス・メンデルスゾーンに寄せる書簡の中でスピノザ學說を論ず」と題したものが匿名で出版されたが、著者は言うまでもなくヤコービであつた。これより先きゲーテはプロメートイスの頌歌を一七七四年か七五年頃にヤコービに與えて、これを版に上すことはしなかつたから、この詩が始めて世に出たのはヤコービの前記の書によるのである。そして一七九〇年に出たゲッシェン版の全集にゲーテはヤコービの書からとり出してこれを載せた。だが頌歌と共に書かれた二幕の斷片劇の方はその後行方不明のまま作者もこれを忘れてしまつていたのである。從つて一八一三年、「詩と眞實」第十五卷を書くときには彼の前にあつたのは頌歌の方だけだつたわけである。一八一九年リーフラントから入つた報道では、二幕の戲曲斷片プロメートイスがレンツの寫しでその遺著の中に發見されたことを傳へた。翌二〇年五月十一日附ツェルター宛の手紙にゲーテはこのことを取上げて、「實に不思議なことですが、私が棄てて忘れてしまつていたあのプロメートイスが今頃になつて浮び上がつて來ました。私の詩集に入つている獨白は第三幕の序としましよう。この原稿が印刷されないように、どうかこれをあんまり公表しないで下さい。革命的な青年層にはこれは福音として歡迎されましようが、ベルリンやマインツの高等委員會の人々は私の若い時代のきまぐれに對して言語同斷なと澁面を作りましよう。けれどもこの一筋繩では片づかぬ火の塊りが五十年もの間灰の下で熱を持ちつづけ、その果に燃え易い物質に燃えつき、破壞の焰をパッと上げさうな危險がまだあるとは珍とすべきですね。」それから十年後、コッタ版の最終全集第三十三卷にゲーテはこの斷片劇を載せ、第三幕の獨白として頌歌を

入れ、今日殘つている形になつたのである。

「詩と眞實」第十五卷でゲーテがプロメートイスの詩に觸れた時、この詩が動機となつてレッシングが自己の思想感情を洩らし、その結果これが爆發の口火となつて、すぐれた人々の祕密の關係を明るみへ出し、そのために大龜裂を生じて、最もすぐれた人メンデルスゾンを失う結果となつたことを述べている。メンデルスゾーンは親友レッシングがスピノザの哲學を信奉することを知つてその意想外の驚愕から恢復し得ず、一七八六年に「レッシングの友人達に寄せる手紙」を公刊して、今は亡き親友のために辯護を試みたが、同年、賴むべきなきこの世を恨みつらみのまま去つたのである。このためにもゲーテの詩は一層問題となつたわけであるけれども、そのことがこの詩を理解する助けになつたかどうかは疑問である。

ゲーテのプロメートイスと言えば詩集に入つている頌歌の方を指して、二幕斷片の方は作者自身からも永く忘れ去られていた程であるが、その後も餘り注意を惹くことがなかつたらしく、一九三二年のアンドレ・ジードのゲーテ讃にも、ドイツの勝れた文學者もこの戲曲斷片を知らぬものが多いのに驚いたことが記されている位である。所でゲーテが頌歌を第三幕に入るべきものとしたのは一八二〇年に斷片が再發見された時の言葉であり、三十年の全集になつてゲーテによつてこのことがなされたのであるから、始めは兩者は別々に書かれたものであろう。そしてまたシュタイガーの指摘する如く、この詩を戲曲の第三幕冒頭の獨白とすることは無理で、詩の中にある句、「ここに坐り、わが姿に似せて人間を作るのだ」とあることはすでにこの劇が始まる前の事柄にあたるのである。それから詩の中の句の多くは二幕の中に殆んど同じ言葉で出て來る所から見ても、この詩が二幕のつづきをなす獨白とすることは困難である。ゲーテはこのままで全集に收錄し、後に加筆することをしなかつたから、これ以上の劇としての展開は遂に見られないのである。ゲーテが第二幕の方を先きに作つてこれを詩に壓縮したのか、それとも詩の一部一部を後になつて二幕戲曲の中へ組入れたのか、は知る由もないが、詩の方が情熱の激して一擧に流れ出た趣きを呈するのに對して、

戯曲の方は苦心して鋲めこんだモザイク細工に似た感を與えるからとて後者の推定の方を有り得ることとしたシュタイガーの說は當つていると見ていいだろう。またシュナイダーの研究に從えば、プロメートイスの二幕は一七七三年十月十二日にはすでに出來上つているから、成立時期は同年の七月中旬から十月初旬の間と見て間違いないと推定される。すると頌歌の成立はそれより前ということになる。

二

一七七三年はゲーテにとつて創作活動の實に旺盛だつた年で、先きに引いたツェルター宛の手紙（一八二〇年五月十一日）の中に、「今たまたま昔の作品に話が及んだのでお尋ねしますが、私の全集にあるザテュロスを注意して讀んで下さつたでしようか。ザテュロスのことが頭に浮んだのは、これがプロメートイスと全く同時であることが思出の中に甦つて來たからです。そのつもりで讀めばこのことは感じてもらえるでしよう。だが今は比較を止めます。一言つけ加へますと、ファウストの主な部分もこの時期にあたるということです。」とあるように、「ファウスト」、「プロメートイス」、「ザテュロス、別名神に祀られた森の魔」などが次ぎ次ぎと筆になつた。この年はまた併しながらゲーテにとつて傷心の年でもあつた。この年四月四日はロッテがケストナーと結婚した日で、豫期されたことではあつたけれども、その日の何と早かつたことか。結婚式までにロッテのシルエットを埋めて神聖な墓を作る豫定は遂に間に合わなかつた。ケストナーに結婚祝いを述べた手紙の中で（四月四日から九日の間）ゲーテは、水なき砂漠を歩き、己が髪の毛を樹蔭と賴み、己が血をオアシスの泉とする孤獨の旅人の姿に自分を見ている。絶望と落膽、すべてのものから捨てられた孤獨感がつのつて來る。「われわれをかくも飜弄する神々を、神よ、許し給へ」（四月二五日ケストナー宛）「私は孤獨です、そして日毎に孤獨はつのります」（五月十日ゾフィ・ラ・ロッシュ宛）また弟殺しもしないのにカインの呪がかかつていると人から言われると訴えたのもこの頃のことである（六月十二日ケストナー宛）。

ゲーテの惱みは愛するからこそであつて、愛することを止めることはできなかつた。愛と生は二つのものではなかつた。去りやらぬロッテの俤、數々の思出、親しく相語り得た夢、すべては傷心の種ならぬはない。そしてこれを一々新婚のロッテの夫に書き送るのである。それは決して厭味ではなく、愛せずには居れない惱みの文字である。だがさうした危機をくぐり抜けようとしてゲーテは制作に向い、制作欲は高まつて來た。七月中旬ケストナー宛の手紙には、今せつせと仕事に勵んでいることが書かれてある。併しウェルテルの執筆はまだで、それは同年九月十五日附の手紙に「私はいま小說を書いているが、遲々たる歩みだ」とあるが、これがウェルテルに觸れた最初である。すでにゲッツの評判はよく、「今までもう數々の稱讃の葉飾り、花環を受け、中にはイタリヤの花さえ交つているが、それを交る交る身につけてみて、鏡に映るわが姿を笑つた」と自嘲をひびかせて語つたのはこの頃のことで、それは新しい創作欲が高まつて來たことを示すものである。

プロメートイス傳說の取扱い方についてゲーテは「詩と眞實」の中で次の如く語つている、「プロメートイスの物語が私の中に甦つて來た。古い巨人の衣服を私の身體に合はせて裁ち、それ以上は考えずに、彼が自力で人間を作り、ミネルヴァの好意で人間に生命を與えここに第三の王朝を作ることによつて、ツォイス及び新しい神々に對して生じた不和を描く作品を書き始めた。……あの詩は獨白としてこの構成の一部をなすのである。」普通にプロメートイスの傳說として知られている、神々の世界から火を盜み、これを人間に與えたがために罰せられてコーカサスの岩に鎖でつながれる話はここには見られず、人間の創造者としてのプロメートイスが登場する。一七七三年七月の手紙にある「今の私の狀態を神々と人間に抗する戲曲に作つている」との言葉でこの戲曲がファウストを指すものと考えられていたけれども、同じ手紙にはその少し前の所に「神々は私に一人の彫刻家をよこしてくれた、彼が望み通りの仕事をしてくれるなら、私は多くのことを忘れるつもりだ」とある所から見ると、この戲曲がプロメートイスを指したものであることがわかる（シュナイダー）。この場合、彫刻家とは造形家、人間を形造るものであつて、それはプ

ロメートイスにほかならぬ。

人間創造者としてのプロメートイスの傳說はやはり古くからあつたらしい。ボイトラーによると、ゲーテが座右を離さなかつたヘーデリヒの神話辭典には古代浮彫の模寫が載つていて、プロメートイスは右手で人間を造り、左手と膝には人間像、傍には粘土の入つた籠、前には出來上つた人間の群像があり、ミネルヴァはこの人間の頭上に蝶々を舞わせながら生命を與えている圖版である。だからプロメートイスの傳說の中から人間造形者、卽ち藝術家としての面を把えることはまさしくゲーテの言う「身體に合はせて衣を裁つ」ことであつたわけである。そしてプロメートイスを藝術家と見ることはゲーテに始まつたのではなく、すでにシャフツベリが一七一〇年に詩人を第二の創造者とした時、**a just Prometheus under Jove** としたのが始まりで、一七七一年ズルツァの「藝術理論」にもこれが受繼がれたということであるから、プロメートイスを藝術家と見る見方は七〇年代には相當行きわたつていたものと思われる。

自力で己が姿に似せて人間像を造つたプロメートイスは當代の若い世代が求めた獨創的天才の原型であつて、ゲーテはこれを主題として戲曲を書く前にすでにこの巨人の名を二度まで擧げている。模倣ではなく獨創を、他に類のない特異性を兼ね備えた偉大な天才藝術家は若きゲーテにとつて一方ではシェークスピアであり、他方ではシュトラースブルク寺院の聖堂建築の棟梁エルヴィン・フォン・シュタインバッハであつた。この二人にそれぞれ捧げた記念の文字はこの頃のゲーテの藝術觀を示すものである。

一七七一年十月十四日、シェークスピア記念の日に當つてなされた講演はこの天才詩人を借りてゲーテのなした心情吐露であつて、それ心に充つるより自ら口にあふれ出たものである。そしてこのことはまたシュタインバッハに捧げた讃辯「ドイツの建築について」に於ても同樣である。「ドイツの建築」は一七七二年、シュトラースブルクで書き始め、七四年、フランクフルトで完結した。だからこの二つの感激あふれる讃歌はシーザー、マホメット、プロメー

トイス、ファウストと次ぎ次ぎ斷片にしろ書きつづけられた七三年の前奏曲をなすものである。

開眼の喜びはその當人にとつては正に天に登る思いのするものであつて、內から溢れ出ようとする力が道を見出し得ぬもどかしさを感じ、外からは束縛の壓迫をうける時、パッと開いた活路はどれだけの大きな喜びを與えたことか。フランス風の演劇規則が直輸入され、それが後生大事に守られねばならないとすると、若い力はどれだけ窮屈に感じ、空想の翼はどれだけ桎梏を感じねばならなかつたことか。狹く閉ぢこめられた暗室から解放されて外の自由な空氣に觸れた時、始めて手あり足あることが感じられる喜び。これがシェークスピアを知つた喜びであつた。ゲーテはこの喜びを胸一杯にもつて語る、成程シェークスピアのプロットはプロットとしては成つていないかも知れない、一般的な趣味から言えば筋が通らぬであろう。「だが彼の作品はすべて秘密の一點をめぐつて廻轉する。それは學者先生たちには見えず、また規定の外にあるものである。われわれの自我のもつ特有な個性、われわれの意欲が主張する自由が全體の必然的な進行と一致するのはこの秘密の一點に於てである。」規則はこの秘密の一點を動かないようにする、つまり天才を殺してしまうのである。「シェークスピアはプロメートイスと覇を爭い、一點一劃彼にならつて人間を作つた。但し巨大な型なのでわれわれはわれわれの兄弟を見失うのである。それから彼はその精神の息を吹きかけて、作つた人間に生命を與え、すべての人物の口から彼が語るのである。それで彼の人物はすべて血つづきであることがわかる。」

シュトラースブルクの聖堂についてもこれまたゲーテにとつて一つの開眼であつた。今まではゴチック樣式と言へば、不確定、無秩序、不自然、寄せ集め、つぎはぎ、積重ねの過剩などの異名に外ならないものと思いこんでいたところ、目の前にいま聖堂を見ると、こはいかに、さながら神の樹の如しと言おうか、魂に宿るバベルの思想がそのまま形をとつているではないか。それは部分でなくて全體である。巨大で、如何なる小部分に到るまで一つの無駄もなく、必然的で、美しい。ここには生きた美しさの具現がある。規則とか原理ほど天才にとつて有害なものはない。そ

れはせいぜい模倣を生むのが關の山である。天才は測量しないで感じる。だから巨大な量感を生むのである。巨大なものに接すると、ちつぽけな趣味をふり廻したり、物指で測つたりするものは目をまわしてしまう。全體としての完全な魂にして始めて巨大なものを把え、識ることができる。

神の樹は卽ち自然そのものである。人間の力を育てるものは自然であつて規則ではない。自然に育てられてこそ少年の芽は成長し、やがて大人になれば現在の力量で行動し、享受することができるようになる。「生れながらにして釣合に對する鋭い目を惠まれ、あらゆるものの形に造作なく技兩を磨くことのできる少年は幸福なるかな。長じては人の世の喜びが汝の周邊に目覺めて行く。仕事と恐れと望みの後に來る歡呼の喜び、實のりの秋が充ち滿つる時、葡萄摘みのあげる威勢のいい勝鬨の聲、鎌の用が濟めば梁にくくりつけて刈手たちの賑やかな踊り。その時汝の手は大きく大人となり、節くれだつた慾望、苦惱を活かし描く。努力と苦惱と享樂を餘さず嘗め、地上の美に堪能すれば、女神の手に懷かれて、その胸に寄り添い、かつてヘラクレスを生みしものを今新しく感じるにふさわしくなれば、天上の美の女神よ、汝は神々と人間の仲介者なれば、願わくは彼を迎え、彼の手により神々の惠みをプロメートイス以上に地上に導かせ給へ。」

シェークスピアとシュタインバッハとに捧げられた二つの讃歌がいづれもプロメートイスを藝術家として取上げている所から見ても、當時のゲーテの胸裡にこの巨人の姿が去來していたことがわかる。シェークスピアによる開眼ではすでに「ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン」の誕生を見た。獨立自由の騎士たらんとして己が手を信じ、己が足で立たうとしたゲッツは歷史の波にもまれ、己が意圖とは反對の結果を招き、遂に自らを亡ぼすに到つた。この人間の悲劇的運命をめぐつて幾つもの人間諸相が示され、作者は測定するよりもより多く感じたものを、規則に縛られずに、自然に卽して描こうとしたことが見られる。鐵の拳をもつたゲッツは鐵の人間ではなく、生一本に生きることを求めて生き得なかつた人間の悲劇像である。

溢れる力が形を生もうとしてまだ生み得ない時は何か烈しいものを求めて止まないものである。傷心と孤獨はゲーテに轉々と居を移す不安定を與えたけれども、それはまた求めることの烈しさに憑かれたからでもあつた。天才の流れが狂亂怒濤となつて氾濫することの如何に稀なるかを嘆き、環境を牢獄と感じることはウェルテルにも、ウィルヘルム・マイスターにも見出されるが、七三年の年はそれがまだ何の形體もとらず、苦悶の中のあがきであつた時である。傷心は身の衰へを感じるまでに強かつたことは、黄金の溶液、活力水をミューズの神たちに求めた言葉にうかがわれる。黄金溶液とか活力水は童話の言葉ではなくて錬金術の用語であつて、ファウストにかかる以前にすでに錬金術の文獻は渉獵していたことを示すものである。そして今や甦生の活路をプロメートイスの傳説に見つけ、自己の全存在を托するに足る像としてゲーテはこれに力を傾けたのである。

後年、「詩と眞實」に於ける回想の中で、多くの作品が孤獨の中で生れたことを述べ、力と工夫欲に缺けていなかつたのに完成が行詰つたのは「散文でも韻文でも自分の文體を持つて居らず、新しく仕事を始める時には、それぞれの對象に應じて、いつでもくり返し手探りして試みなければならなかつたから」であつた。「この場合、人間の援けを拒み、更にこれを排除しなければならなかつたので、プロメートイス張りに神々からも身を離した。私の性格、ものの考へ方ではいつでも一つの考へが他のすべての考へを呑みつくし、押しのけてしまつたのだから、そうするのも自然の勢いであつた。」と語つている。模倣ではなく、すべてを自力で求め、創つて行くのには既成既存のものと當然衝突せざるを得ない。ギリシャ神話に於ける反抗の巨人たち、タンタロス、イクシオン、ジジフオスはゲーテにとつて「聖なる像」であつた。これらの神話像に寄せる彼の同情も大きかつた。併しすでに古代人によつてもこれらの巨人たちがたどらねばならぬ悲劇は認められていた。と言うのはこれらの巨人たちは神々の世界にあつて下位の服從に甘んぜず、心驕れる客として主人側のツォイスの怒りを買つたのであるが、そこに形成、創造の働きは見出されて居らなかつたからである。之に反してプロメートイスは神々に反抗して創造し、形造る力を持つていた。「天を襲はん

とする巨人反抗は私の作風に素材を與えなかつた。むしろ私にふさわしいことは平和で、造形的な反抗、上の權力は認めるが、これと等しからんことを願う忍耐の反抗であつた。」この言葉は「詩と眞實」を書いた時のものであるから、今これをこのまま適用してしまつていいかどうかに問題はあるかも知れないが、單なる反逆者として止まることの危機はゲーテは自己の內部にこれを感じたばかりでなく、周圍にその幾多の例を見たことであつたから、この當時にあつてもこのことはすでに感じていたに違いなかつた。

三

二幕のプロメートイス劇ではすでに人間塑像は彼の手に成つて出來上り、彼はオリンポスの世界と手を切り、自ら獨立して自分の世界を確立しようとしている。ここに神々の世界から使者がやつて來る。まづ始めに來たのがメルクール。プロメートイスの語氣はすこぶる荒く、斷乎として己が意志を主張し、意志と意志との正面衝突で一對一だとはねつける。メルクールは父母の名を持出す。これによるとプロメートイスはツォイスを父とすることになる。父母の保護あつての今の身ではないかとの言葉に對してプロメートイスは答える。わが足が立つと感じた時に立ち、わが手が伸びると感じた時に手を伸ばしたのであるとて、自らの力をたのみ、自ら立つ氣慨は父母を否定してまでも烈しく迸り出るのである。更に大蛇を退治し、巨人族を打破つたヘラクレスの業までプロメートイスの力として加わる。力の自意識は力と力の關係を追求する。天と地を手中に固め、己が分身を生み、我を一つの世界にまで擴げる力、その無限の力は全能の時間、運命の持てる力ではなかつたか。神ではないと自ら言うプロメートイスは運命の力の前では神々と等しいことを自覺し、從つて神々への服從は拒むのである。そこでメルクールは這々の體で去らねばならない。

己が手になる人間塑像は森一杯に散在している。創造の喜びで胸あふれるプロメートイスは人間塑像に向う時、そ

れはかけがえのない貴重な時間である。ファウストがワーグナーに高揚の瞬間を妨げられて腹を立てたように、プロメートイスも立腹してメルクールを追歸し、それから己が生める子等に向つて話しかける。とある乙女の像に近ずくと、その胸は今にも高まり波うつ如く、その目はもうもの言いたげな樣子ではないか。言え、いとしの唇よ、我に語れ。併し生命なき塑像は自己自身を感じることができない。造形は大成功であるが、生命を自力で與えることができない所にプロメートイスの限界がある。

次ぎに弟のエピメートイスが來る。今度は前回と違つて服從を求めず、その代りにオリンポスの坐を認めて、そこに復歸して地上の支配權を持つことを申出る。プロメートイスは所有のけじめをはつきりつけることを求め、自分のものは自分以外のものの一指も觸れることを許さない。エピメートイスが兄の孤立を指摘し、神々も汝も汝の作つたものも世界も天も、すべてが一つの全體として感じられる調和の喜びを片意地張つて知らずにいるのだと說くと、プロメートイスは、それがわからぬではないが、今は獨りわが道を歩みたいとて弟と別れる。プロメートイスには己が手で作つた世界にこそ自由が感じられる。數々の願いは今すべて具體的な肉體の姿をとつて出現し、彼の精神は限りなく分れて己が作つた子等に與えられた。生みの喜びは調和に復歸する喜びよりも大きい。

三番目にミネルヴァ登場。ミネルヴァは何の要求も傳えない。女神はプロメートイスの妹となつて居り、始めからツォイスを敬い、兄を愛していると言う。すでにプロメートイスの語氣は第一回目より第二回目と次第に柔いで來たが、今は更に愛のひびきをこめて來る。知性の光はミネルヴァのもの、そして早くから妹への愛情を懷いていたので二にして一の調和感をプロメートイスはミネルヴァによつて知つたのであつた。女神の語るを聞けば彼の心が自身に語るが如く、自から打開け、賦性の調和が鳴りひびく心地し、我かあらぬか、女神が語るかと思えばそれはわが言葉であつたのである。プロメートイスの力はそこから湧いて來たのであつた。だから神々やツォイスは何の權利があつて彼の力を横取りできるであらうか。創造の仕事、アトラスの如く天地を負い、ヘラクレスの業を日課としてなして

來たのも神々に本源の叡智があると思えばこそだつた。プロメートイスは奴隷の如く仕事を果している中に恃むものは自己の知と力であると自覺して來たのだから、もはや服從を認めることはできなくなつたのである。

併しミネルヴァはその憎しみを不當とする。何故なれば永續と力と知と愛は神々に與えられたものであるから。併しミネルヴァはこのことについて說明しない。プロメートイスは永續の點では神々と等しく、力はすでに自覺する所、知については人間像の成功がある。彼が特に精魂傾けて作つた女體像をパンドーラと呼ぶ。廣い天の下、限りなき地の上にある一切の喜び、太陽の愛が與える春の喜び、海の波がゆるやかにさしのべた愛撫の手、澄んだ天の輝き、安心の樂しみ、すべてを打込んで作つたパンドーラ。これこそ彼の知の結晶である。この時ミネルヴァは塑像に生命なきことを暗示し、ユピテルはその申出を承諾すればすべての像に生命を與える約束をしたことを傳える。その言葉には思案せざるを得ないけれども、新しく生れたものは、たとい生命がなくても自由を持つている。その自由を感じるからこそ奴隷になりたくないと拒む。創造と自由、ミネルヴァの叡智はこれを理解する。そして生命の與奪は運命の手の中にあつて神々にはないのだからとて生命の泉への案內役を引受ける。自由と生命が一致した、生きる喜びに滿ちあふれて第一幕は終る。

第二幕では人間に生命が與えられた。人間は泣き、笑い、苦しみ、喜ぶことができる。そしてプロメートイスの似姿として作られた人間はまた神々への反逆兒である。プロメートイスは人間に技術を敎え、小屋の作り方を始めとして文明の手引きをする。だが人間の中には慾望が目覺め、所有慾は爭いを生む。天に反抗する精神を與えられた人間はお互の間に爭いを生んで行くが、プロメートイスはそれだからとて失望しない。人間は二つの面を持つ、勤勉と怠惰、殘忍と溫情、大腹と物惜しみ、人間は神々と獸と兩方に似るのである。生命を與えられた人間はやがて死を知らなくてはならない。死についてプロメートイスはパンドーラに說明する。昇る太陽、動く月に胸はまず喜びのときめきを感じる。遊び仲間と交わす口づけ、踊りと歌。だがまた喉の渴きの喘ぎ、足の疲れ、失つた羊に流す涙、足を刺

された痛さ。生きることの喜びと苦痛の數々、そしてまだ知らぬ苦樂は限りなくある。あこがれ、夢み、望み、恐れたことのすべてが叶う瞬間、つまり生の充足の瞬間が卽ち死だと言うのである。

あらゆる感情を心の底から感動して覺えると五感は失われ、この身自らも消えてなくなるかと崩れる。周りのものみなはそれと共に夜の闇に沈み、ただこれだけはわがものとして一つの世界が把えられる。それは愛か、死か。プロメートイスはこれが死だと敎える。ならパンドーラならずとも死にたいと願わざるを得なくなる。そして死の後に來るものは？　慾望も喜びも悲みもすべてが一擧に享けられて溶け合い、眠りに力を恢復すると、また甦つて若返える。そして恐れ、望み、求めることがまた新しく始まる。生の充足が死、死はまた生への甦りである。愛と死と甦生はゲーテの生涯を通じて奏でられる基調音であるが、プロメートイスの死の說明には暗い蔭がない。プロメートイスは死の讃美者でなく飽くまで生の支持者である。不可解の死の現象に驚愕するパンドーラに向つてなされる死の說明はさながら愛を說くに似ている。すでに生命なき塑像であつたパンドーラにプロメートイスは愛の言葉を捧げた。生命の得失は運命の手中にあるけれども、一旦人間が創造されて生命を與えられた以上、人間は持續する、そして感情體驗は豐かになつて行く。今は人間が生れてまだ若い、プロメートイスも人間と共に若い。死の恐怖よりも生の喜びの方がはるかに强いのである。

第三幕は前にも觸れた如く頌歌が獨白として入つて來る。ところがこれが後になつてここに組み入れられた時、その後に「ミネルヴァ登場、もう一度調停の橋渡しを試みる」と卜書が加えられた。叛いて背を向けたオリンポスの世界との調和がこれで豫想される。けれどもこれが始めからの豫定であつたものか、それとも後になつてその考えが加えられたものか、は直ちに決定することはできない。所で第二幕の始めにオリンポス山上の場があつて、そこではメルクールが、無斷で人間に生命の與えられたこと、しかもユピテルの娘ミネルヴァが謀叛人に加擔したこと、從つてプロメートイスをめぐつて活動と喜びが一杯に漲つているから地上に今や第二のオリンポスが出現したことを報告

し、これを亡ぼさないとオリンポスの座が揺ぐことを訴える。ユピテルはこれに對して、人間は存在する以上は彼等に未來があり、これは運命の意志であつて、否定できない。天上地上の支配はこの手にあるから、從えばよし、從わねば痛い目に遭うばかりだと答え、動ずる氣色はない。ユピテルは人間を眼中におかず、これを蟲けらと見做し、その數が增せば奴隷の頭數が增すことにほかならぬとする。メルクールはそれを聞いて、それではせめてもその寬仁大度を人間に知らせて恩を感じさせてやりたいからとてその許可を願う。ユピテルはそれはまだ時期尙早だと却ける。卽ち人間は今生れたばかりの喜びで神々と等しいと考えている、そんな時には何を言つても耳を貸すものではない、こちらを必要とするまで放つておくがいいというのがユピテルの腹である。ということはいつかはその時期が來ることの豫想であろうか。

自力一本を恃みとしたプロメートイスの限界はエピメートイス及びミネルヴァが彼のオリンポスに對する憎しみの不當を指摘することによつて示された。そしてミネルヴァは神々に與えられたものとして力の他に愛と知を擧げたが、これはまだ具體的には描かれていない。第二幕始めのユピテルの態度には、たとえプロメートイスが叛逆して調和を斷念しても、調和そのものは失われてしまつたのではないことが現われているけれども、それがどう展開するかはわからない。そしてユピテルはエホバの神ではない。人間を蟲けらと見、奴隷の頭數に數えているにすぎない。他方プロメートイスの叛逆の契機の一つとして獨白に出て來る所では神々の冷酷である。重荷を負えるものの苦痛を和らげ、不安に苛まれるものの涙を鎭めることを一度もしたことのない神々に尊敬を寄せることはできないとするならば、兩者の調和を結ぶ愛の契機は何處から生じるであろうか。或はその困難が書きつづけることを阻んだのであろうか。

プロートイスにくらべられるゲーテは變化自在で、一つの思想に固定して考えることはできない。プロメートイスの頌歌とならんでガニュメートの歌がある。春は曙、愛の歡喜の手をさしのべて春はあこがれ心をそそる。春戀いし

と手をのばして懐けばそのまま春の胸に懐かれ、戀いこがれる熱ぽつたい胸の渇きはひんやりと醫される。霞こめ立つ谷間の鶯の歌は愛の呼び聲、呼べば應える阿呍の呼吸、こがれる心は空を指し、空なる雲は傾き垂れ下り、かかえつかかえられつ、ただひたぶるに全愛の父の許へと昇り行くガニュメートの歡喜は全篇にみなぎる。「マホメット」では神に向つて人間をその縛めから解くことが願われる。詩集にマホメットの歌として載つているものは、戯曲斷片の方ではアリとファテマが交互に歌い交わす二重唱となつている。岩間から嬉々として迸り出る泉の水が清く輝きつつ雲の高間から跳び下り、こだまを天に返す。斷崖を越え、細流を合して行けば、開け行く谷間で花咲く野をうるほし、やがて流れて平野に來れば、ゆるくうねつて大河と合して舟をのせる。砂に吸はれ、日に乾き、丘に阻まれ池となる身もあるけれども、呼び交わす聲は等しく、相共に流れ流れて、そのはては生みの父なる大海原へと戀いこがれる願いの合唱。父への復歸、調和への融合、そこに始めて喜びの歌が生れる。プロメートイスは父なるツォイスには叛くが、彼が父として己が作れるパンドーラの像に向う時は、ガニュメートや水の歌とは反對の立場、生みの親の立場に立つて歡喜の聲が胸からあふれ出て來る。その喜びは創造の働きから生れ出たもので、創造の自由を持つためには創造を持たぬ神々から叛く孤立を避けることはできなかつた。この後に來るものとしてミネルヴァの再度の調停の試みがどのやうな結果を導くは今は知る由もない。

アンドレ・ジードがゲーテに寄せる感謝を述べた中に次のような言葉が見出せる、ゲーテを讀み返すと、彼の中にすでにニィチェの芽が見られる。必ずしもファウストから超人を壓し出すには及ばない。プロメートイスを讀めば、人間の大きな仕事は神々に叛逆することなしにはなされなかつたことがわかる。そしてこの點でゲーテはニィチェの先驅者をなすのである。ゲーテの平和を好む精神はファウストを神と和解させたし、また神々への最初の叛逆者をオリンポスの神々と和解させることもできるとの望みをもつていた。但し十分な諒解の形式を見出すことに成功しなかつたか、この諒解が不可能で無駄であると知つたか、いずれかにこの作の中斷の理由がある。とは言えゲーテはこ

の作品を絶えず考へていた。それはこの作品が彼自身の思考の分裂の象徴であり、レジュメであるのだから、と。かく觀察するジードはたしかにドイツ精神の分裂性に對して敏感である。彼と同年代の作家は多かれ少なかれ、みなニイチェ經驗をそれぞれ持つのだが、ジードのゲーテに寄せる感謝はニイチェ經驗によつて一層大きくなつたに違いない。ニイチェは獨身を通したから大膽に前進をつづけたが、ゲーテの場合にはプロメートイスがパンドーラに寄せた愛がある。パンドーラなきプロメートイスたる巨人ニイチェは亡びた。ゲーテには均衡がある、そして均衡は抑制から來る。ゲーテの宇宙的擴がりは抑制によつて均衡を得て美事な實を結んだのであるとジードは驚嘆を惜しまない。

現存の秩序や自分自身に滿足することができず、疑い、ほじくり、あら探しをして、果ては自己の生命を喰いつめてしまう疑問型の人間は特にドイツには多く、ゲーテは周邊にその例を見、また自分の中にもその危機を感じたことも一再に止らなかつた。タンタロスやジジフォスの傳說に興味を持つてもこれを作品にとり上げず、またプロメートイスにしてもコーカサスの岩山で禿鷲に夜毎こづかれる傳說はとらず、創造の働きをもつた姿で把えたのも、均衡を失した不毛を拒んだからにほかならなかつた。徒らに叛逆のために身をすりへらすばかりで、生への甦りをもたない傳說、かかる意味での悲劇はまさしく彼の身に適う衣ではなかつたのである。ジードがゲーテのプロメートイスにニイチェの先驅を見たのはフランス精神から見て特異なものを感じたからであろうが、ゲーテの避けた悲劇は同じく藝術家の主題ながらパンドーラなき、或はパンドーラを拒んだプロメートイスとしてトーマス・マンのドクトル・フアウストウスに展開して行つたことを思えば、抑制することによつて生れる均衡が失われた嘆きを更に深くせざるを得ない。

神と等しい力を恃むプロメートイスはフアウストと血つづきであり、二つの作品の出發が時期を等しくすることもこれがゲーテの分身にほかならぬからであるが、プロメートイスの場合は、始めにすでに人間塑像が出來上つていたこと、これに生命を與えるにはミネルヴアの援けを得なければならなかつたこと、つまり早く實を結んでしまつて、

地上での愛と死と甦生の生の循環が實を結ぶだけの成熟には到らなかつた。トーマス・マンはドイツ精神のテンポはアンダンテであると云つたが、ゲーテこそ成熟への歩みを辛抱強くなしつづけ、そしてこれを達成した人である。プロメートイスで出た芽は五十年に近い年月を經てファウストで實のり多き收穫を得たのである。それには地上に於ける行爲の完成がなければならなかつた。そしてそれに到る長い道程がなければならなかつた。プロメートイスでゲーテは疑問型の人間の反抗をとり上げたが、それは破壞へ向う道をたどらずに造形の道をとつたが故に、實現を見なかつたとは言え調和の豫定を含み得たのである。その意味でこれはシュトゥルム・ウント・ドラング期の獨創的天才へのゲーテ的批判と見ることができる。（本研究は昭和三十一年度文部省科學研究費による「シュトゥラルム・ウント・ドラング期に於ける天才概念について」の研究の一部をなすものである。）

參考文獻

Goethes Werke Meyer-Klassiker Festausgabe 8. Einleitung und Erläuterung von R. Petsch

Goethe Gedenkausgabe der Werke, Briefe und Gespräche 4, 13, 18. Einführung von Chr, Beutler

O. Walzel: Das Prometheussymbol von Shaftesbury zu Goethe

Fr. J. Schneider: Goethes Satyros und der Urfaust

E. Staiger: Goethe Bd. 1 (1749-1786)

R. Petsch: Goethes Stellung zur Unsterblichkeitsfrage (Gehalt und Form Bd. 1)

Fr. Koch: Goethe und Plotin

Leisegang: Lessings Weltanschauung

A. Side: Dank an Goethe